

宇部市における RC 造 2K 型住戸の1DK への改修による 中高齢夫婦世帯の住み方の変化

－ 公営住宅ストックの高齢世帯向け住戸改善に関する研究 その3 －

CHANGE IN LIFESTYLE OF MIDDLE AGE AND AGED COUPLE HOUSEHOLDS WITH HOUSING UNIT RENOVATION OF TWO ROOMS AND KITCHEN TO ONE ROOM AND DINING KITCHEN IN UBE CITY

－ A research on the renovation of existent public housing for aged households Part 3 －

大庭 知子*, 中園 真人**, 佐々木 俊寿***

Tomoko Ooba, Mahito Nakazono and Toshihisa Sasaki

The purpose of this research is to validate the adaptability to 1DK by revealing what changes have taken place in the life-style of aged couple households after their dwellings were renovated from 2K to 1DK. The changes indicate that 50% of the dwellers chose to have their meals in the DK room and sleep in the traditional Japanese-style 6 mat tatami room. However, the half of these couples use Japanese low tables in the DK in their daily lives because preferences developed over a long life-time. On the other hand, half of households cannot adjust to 1DK.

Keywords : Public housing, Renovation, Two rooms and kitchen, One room and dining kitchen, Life-style, Couple households

公営住宅, 住戸改善, 2K型住戸, 1DK型住戸, 住み方, 夫婦世帯

1. 序論

1970年代前半に建設されたRC造2K型の公営住宅ストックの計画の更新の方法としては、建替え・全面改善のみでなく、台所設備とサニタリーを高齢者向けに改修する、1DK型住戸への改修も典型的方法として位置づけられる。しかし、長期居住者の多さと高齢者の住み方の継承性の強さを考慮すると、大幅な住戸プランの変更が高齢者の住み方に与える影響は大きいと考えられ、居住者の住み方に適応した改善手法の検討が課題である。

本研究は、2Kから1DKへ改修された住戸に居住する中高齢世帯の改修前後の住み方の特徴を明らかにし、2K型住戸改善における平面計画のあり方を考察する一連の研究で、既報その1¹⁾では、夫婦世帯と単身世帯の改修前の2K型住戸での住み方の特徴を整理し、台所に隣接する4.5帖で食事・寛ぎを行い6帖で就寝する基本的な住み方は少なく、夫婦別就寝や一室で生活が完結する高齢単身世帯の多さと、これらの世帯が1DKへの改修により現状の住み方を継続することが困難であることを指摘した。その結果、夫婦世帯と単身世帯の問題点の相違により、それぞれ稿を分けて改修前後の住み方比較を詳細に報告する必要があると考え、既報その2²⁾では単身世帯の改修前後の住み方の変化を報告した。生活行為と居室と行為の対応関係、起居形態、家具保有量、身体機能、習慣の継承等を視点に住み方の変化の実体とその要因を分析し、台所隣接和室で食事・寛ぎ

を行い、もう一室で就寝する食寝分離の住み方の世帯と、一室完結タイプでも比較的若く健康な来客の有る世帯は1DKへ順応しているが、来客の無い70歳以上の世帯は常座^{注1)}周辺で生活を完結する志向が強いため1DKへの適応性が低いことを明らかにした。

一方夫婦世帯の場合には、夫婦の生活時間の相違や配偶者の身体機能低下により夫婦別就寝や夫と妻の個室化が進んでいた世帯において、二室から一室への居室の減少が住み方に及ぼす影響は大きいと考えられ、夫婦の生活時間や夫婦同別室就寝の変化が重要な分析課題となる。

関連する既往研究としては、高齢夫婦の同別室就寝実態を事例的に分析し²⁾就寝室の必要性を述べたもの³⁾、中高年夫婦の就寝空間の現状と背景を捉え、住居平面計画の方向性を考察したもの⁴⁾、共働き夫婦の居住空間の構成原理を明らかにしたもの⁵⁾等がある。

本論では、単身世帯と同様の分析視点に加え、夫と妻の食事や寛ぎ、夫婦同別室就寝の変化等に着目し、改修前後の住み方比較から1DKへの適応性を検証し、2K型住戸改善のあり方や住替え誘導について考察を加える。本論は夫婦世帯の住居平面計画のあり方について考察する点で上記既往研究に類似するが、全住戸が2Kから1DKへ改修された公営住宅における戻り入居者の住み方の変化要因に着目している点が特徴である。

* 山口大学大学院理工学研究科 博士後期課程・修士(工学)

** 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

*** 宇部市都市開発部 次長

Doctoral Course, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., M. Eng.

Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

Vice-chief, Dept. of Urban Development, Ube Municipal Office

表1 改善前後の住み方一覧

事例番号	居住年数(注1)	勤務	回答者	夫婦同別室就寝	改善前										改善後										接客の有無	備考
					居室使用状況	性別年齢	食事[団らん]形態	就寝形態	6⇔4.5 建具開閉状況	冷暖房の種類 [主に使用する居室]		A/C 使用頻度	家具占有率 (%)	夫婦同別室就寝(注3)	居室使用状況	性別年齢	食事[団らん]形態	就寝形態	6⇔DK 建具開閉状況	冷暖房の種類 [主に使用する居室]		A/C 使用頻度	家具占有率 (%)			
										夏	冬									夏	冬					
C1	35	共妻	妻	夫婦同別室就寝	副室生活拠点	M60-F58	座卓	布団	閉	AC・扇 [6・4.5]	ス[6・4.5]	就寝時のみ使用する	33.3	同	主室生活拠点	M63-F61	座卓	布団	半開閉	AC[6] 扇[6・DK]	ス[6・DK]	就寝時のみ使用する	30.0	前:子供や孫が頻繁に宿泊する。後:子供や孫が頻繁に来るが宿泊しなくなった	夫婦共に健康である。	
C2	36	夫妻	妻	夫婦同一就寝	副室生活拠点	M60-F57	座卓	布団	半開閉	AC[6・4.5・K] 扇[6・4.5]	ス[6・4.5] 力[4.5]	日中は頻繁に使用し、就寝時はタイマーで切る	31.2	同	主室生活拠点	M64-F61	座卓	布団	半開閉	AC[6] 扇[6・DK]	ス[6・DK] 力[6]	日中は頻繁に使用し、就寝時はタイマーで切る	32.0	前・後:ほとんど来ない	夫婦共に健康である。	
C3	31	無	妻	夫婦同一就寝	主室完結	M70-F63	座卓	ベッド	半開閉	AC・扇 [6・4.5]	ス[6・4.5] 力[4.5]	日中は頻繁に使用し、就寝時はタイマーで切る	40.9	同	副室生活拠点(二室一体)	M73-F68	座卓	ベッド	取外し	AC・扇 [6・DK]	ス[6・DK]	日中は頻繁に使用し、就寝時はタイマーで切る	34.2	前・後:娘が頻繁に訪ねて来る	夫婦共に健康である。改善前、副室を娘の宿泊室として確保していた。	
C4	35	共妻	妻	夫婦同一就寝	主室完結	M55-F55	座卓	布団	半開閉	AC・扇 [6]	ス・カ [6]	日中は頻繁に使用し、就寝時はタイマーで切る	37.0	同	副室生活拠点(二室分離)	M57-F57	テーブル	布団	半開閉	AC[6] 扇[DK]	ス・カ[6]	日中は頻繁に使用し、就寝時はタイマーで切る	29.7	前・後:ほとんど来ない	夫婦共に健康である。改善後もテレビは6帖の座卓で視聴する。	
C5	30	夫妻	妻	夫婦別就寝	副室生活拠点	M62-F60	座卓	布団	取外し	AC[6] 扇[6・4.5]	ス・カ [6・4.5]	あまり使用しない	28.3	同	副室生活拠点(季節による起居形態の変化)	M65-F63	夏:座卓 通常:テーブル	布団	取外し	AC[6] 扇[6・DK]	ス・カ[6]	あまり使用しない	22.8	前・後:子供や孫が頻繁に遊びに来る	夫婦共に下肢関節の疾患により膝の屈伸が困難であるが、夫の症状の方が重い。	
C6	23	無	妻	夫婦別就寝	副室生活拠点	M71-F64	座卓	布団	閉	AC・扇 [6・4.5]	ス・カ [6・4.5]	あまり使用しない	37.4	別	主室生活拠点	M75-F68	座卓	布団	半開閉	AC・扇 [6・DK]	ス・カ[6・DK]	あまり使用しない	28.7	前・後:盆や正月に子供や孫が来る	夫は要介護であり、一日中臥床しがちである。	
C7	29	夫妻	妻	夫婦別就寝	主室生活拠点	M54-F54	座卓	布団	半開閉	AC[6・4.5]	ス[6・4.5] 力[6]	24時間使用する	34.6	同	副室生活拠点(二室一体)	M57-F57	座卓	布団	取外し	AC[6・DK]	ス[6・DK] 力[6]	24時間使用する	27.4	前・後:娘が時々宿泊する	夫婦共に健康である。	
C8	35	妻	夫	夫婦同一就寝	主室生活拠点	M67-F62	座卓	布団	閉	AC[6] 扇[6・4.5]	ス[6・4.5] 力[6]	あまり使用しない	35.3	別	主室生活拠点	M70-F65	座卓	布団	閉	AC[6] 扇[6・DK]	ス[6・DK] 力[6]	あまり使用しない	29.8	前・後:盆や正月に子供が来る	夫は退職している。	
C9	36	無	夫	夫婦同一就寝	主室生活拠点	M72-F70	座卓	布団	半開閉	AC・扇 [6・4.5]	ス[6・4.5] 力[6]	日中に時々使用する	43.0	同	主室生活拠点	M76-F74	座卓	布団	半開閉	AC・扇 [6・DK]	ス[6・DK] 力[6]	日中に時々使用する	32.4	前・後:孫やひ孫が時々遊びに来る	夫婦共に膝の屈伸が困難であるため、改善前は食事のみ台所に近い副室で折り畳み座卓でとっていた。	

凡例 □ 改善前後で変化した項目。注1)居住年数は、住戸改善後の調査時点での年数、注2)「K」は改善前の台所、「AC」はエアコンディショナー、「扇」は扇風機、「コ」はコタツ、「カ」は電気カーペット、「ス」はストロフの略、注3)「同」は夫婦同一就寝、「別」は夫婦別就寝の略

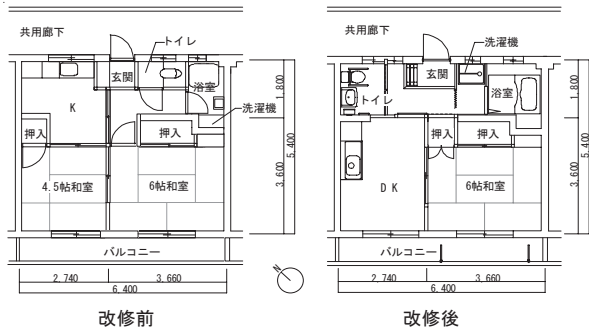


図1 HS団地住戸平面図

2 調査の対象と方法

調査対象団地(HS団地)は、1969-1970年に建設された中層耐火造片廊下型の4階建て3棟構成で48戸を有し、床面積が34.5㎡の南面2室型2Kタイプであった。2003-2005年度に毎年1棟ずつ改修され、住戸外ではエレベーターとスロープが共用階段入口部分へ新設された。住戸内では、台所設備とサンタリーの高齢者向け改善に加え、室内の段差解消や玄関ドアノブのレバーハンドルへの付替え、照明用ワイドスイッチと緊急ブザー設置が行われ、台所の一部と台所に隣接する4.5帖和室を板張りにしてDKに変更し、6帖和室を残す1DKプランとなった。また、工事期間中は徒歩1分圏内の家具家電付き民間賃貸住宅を市が借上げ、仮住まいとして居住者に提供していた。

改修前後において同内容の住み方調査を実施し、改修後の住環境に関するアンケート調査と住戸内のプラン採取及び住み方の聞き取りを行った。調査期間は、2004-2007年の9月と3月である。46世帯(本来48戸あるが2室空室)中夫婦世帯は11世帯居住しており、内9世帯を対象に調査を実施した。

3. 居室と行為の対応関係の変化

事例ごとの住み方の詳細を表1に示す。住戸改善前後の住み方の比較分析方法として、第一に夫婦の同別室就寝に着目し、夫婦同一就寝と夫婦別就寝に区分する。次いで、6帖を主室、4.5帖(改善前)またはDK(改善後)を副室とし、主室で食事・団らんを行う場合を「主室生活拠点」、副室の場合を「副室生活拠点」と定義する(注2)。一方、主室で食事・団らん及び夫婦の就寝が完結する場合は「主室完結」、副室の場合を「副室完結」と定義する。

次に図2の改善前後の基本的な生活行為の場をみると、改善前は夫婦同一就寝(4例)と夫婦別就寝(5例)はほぼ同数で、同様に、主室に生活拠点を置く世帯(5例)と副室に生活拠点を置く世帯(4例)もほぼ同数であった。改善後は夫婦同一就寝が増加しており(4→7例)、生活拠点室の変化は認められるが、主室に生活拠点を置く世帯(5例)と副室に生活拠点を置く世帯(4例)はほぼ同数のままである。また、副室で食事・団らん・接客を行い、主室で夫婦同一就寝する食寝分離の住み方は増加したものの(2→4例)、主室で食事・団らんを行う主室生活拠点の食寝一致の住み方も5例と約半数存在しており、ユカ座志向の継承性の強さが窺える。

続いて、改善後の住み方毎に改善前後の変化をみていく。改善後に夫婦同一就寝で副室生活拠点となる世帯は4世帯(C3, C4, C5, C7)で、C3とC4の2世帯は、主室での夫婦同一就寝を継承し、主室完結から副室生活拠点へ移行したため、食寝一致から食寝分離の住み方へ変化している。次いで、C5とC7の2世帯は、夫や妻の副室の就寝の場が主室へ移行し、夫婦別就寝から夫婦同一就寝へ変化している。それにより、C7は主室での食事が副室へ移行し、C5は副室での食事を継承したため、C3とC4同様食寝一致が解消されている。

対照的に、夫婦同一就寝で主室生活拠点の2世帯(C1, C2)は、主室

改善前		改善後		夫婦同一就寝						夫婦別就寝	
				副室生活拠点				主室生活拠点		主室生活拠点	
				二室分離		二室一体		季節による起居形態の変化		寛(妻)又は食	寛(妻)
				食・団接	食・団接	通常	夏	食・団接・寝	食・団接・寝		
夫婦同一就寝	副室生活拠点	食・団接	寛(妻)注1)						C1, 2		
	主室完結	接又は余	食・団接・寝						C4	C3	
夫婦別就寝	副室生活拠点	食・団接	寛(妻)注2)							C5	C6
	主室生活拠点	寛(妻)	食・団接・寝							C7	
		食・寛(妻)	団接・寝								C9

凡例 「食」は食事、「団」は団らん、「寛」は寛ぎ、「接」は接客、「寝」は就寝、「余」は余室の略であり、夫婦の寛ぎや就寝の場が異なる場合、妻の寛ぎの場を「寛(妻)」と記す。「余」は余室の略であり、夫婦の寛ぎや就寝の場が異なる場合、妻の寛ぎの場を「寛(妻)」と記す。[]内は改善前からベッド就寝。注1) 主室での寛(妻)はC2をさす、注2) 主室での寛(妻)はC6をさす。

図2 改善前後における基本的な生活行為の場

での夫婦同一就寝を継承するものの、副室生活拠点から主室生活拠点へ移行したため、食寝分離から食寝一致の住み方へ変化している。またC9は、妻の就寝の場が主室へ移行し、夫婦別就寝から夫婦同一就寝へ変化した。最後に、夫婦別就寝で主室生活拠点の2世帯(C6, C8)は、夫婦が別々の居室での寛ぎ・就寝を継承するため、夫婦別就寝で食寝一致の住み方のまま変化していない。

4. 改修後の評価と住み方の事例

4.1 住戸の評価

住戸改善前後に実施した間取りや広さ等の11項目に関する同一内容のアンケート調査結果を表2に示す。改善前の改善要望度は、11項目から居住世帯が改善を望む3項目を選択する形式で、回答数で表示する。満足度は11項目に関する評価を「満足5、やや満足4、普通3、やや不満2、不満1」に点数化した値を示す。

改善要望度はトイレの設備が7/9と最も高く、次いで浴室の設備と台所の広さが3/9、浴室の広さと給湯設備が2/9であり、水まわり関連が上位5項目を占めているのに対し、収納の広さや住宅の広さといった居室関連は6位以下の1/9以下である。満足度の平均値も水まわり関連の評価は全て2.2を下回り、居室関連の評価は全て2.4を上回っており、居室部分の改修よりも水まわりの改善を求める居住者の多さが読み取れる。

改善後は水まわり設備の満足度が上昇し、高齢者向けユニットバスの評価が最も高く、評価値も2.4上昇しており、次いで、和式便器から手摺付洋式便器へ改修されたトイレが2.3上昇している。続いて、車椅子での使用が可能な高齢者向けケアキッチンが導入された台所が2.0、台所・浴室・洗面に設置された給湯設備が1.8上昇し、上位4項目は設備関連が占め、満足度も3.9を上回り改善効果が顕著である。ただし、広さの評価値はトイレが1.5、DKが1.2、浴室が1.1とそれぞれ上昇しているものの、設備の評価の上昇と比

表2 住戸改善前後のアンケート結果

項目	改善要望度	満足度																平均値		
		C4		C3		C7		C5		C1		C2		C9		C6			C8	
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後		前	後
トイレ設備	7	1	3	3	3	1	3	4	5	1	5	1	5	3	5	2	2	5	2	4.3
浴室設備	3	1	4	2	3	2	3	3	5	1	5	2	5	2	5	2	3	5	2	4.4
台所(DK)広さ	3	1	3	2	3	2	1	1	3	2	1	2	5	2	4	3	2	5	1.9	3.1
浴室広さ	2	2	4	2	3	2	2	3	5	2	1	3	2	4	3	3	5	2.2	3.3	
給湯設備	2	1	4	1	2	2	1	3	5	4	5	1	5	2	4	4	1	5	2.1	3.9
台所設備	1	1	3	2	3	2	4	1	4	4	5	2	5	3	4	3	1	5	2.1	4.1
トイレ広さ	1	1	1	3	3	2	3	3	3	1	4	1	5	3	4	2	2	5	2	3.5
収納広さ	1	1	1	3	1	3	3	2	2	1	3	1	2	2	4	2	3	2.4	1.8	
住宅広さ	1	1	1	2	2	3	1	3	3	2	1	3	3	3	2	4	1	3	2.4	2
間取り	0	2	1	2	2	3	1	2	1	2	1	3	3	3	2	3	2	3	2.4	1.8
日照通風	0	3	3	5	4	5	5	2	5	5	3	5	3	5	3	5	5	5	4.6	4
未回答	2																			

凡例 満足度の未回答は空欄とする

べ相対的に低い。居室関連の満足度は、住宅や収納の広さは変化していないものの、改善後の評価は全項目0.5前後低下しており、4.5帖がDKへ改修され二室から一室になったため、居室や家具配置スペースの減少が評価の低下をもたらしているものと考えられる^{注3)}。

4.2 夫婦同一就寝・副室生活拠点の事例

(1) 事例C4

改善前は主室で生活が完結していたC4は、副室はタンスや机等の大型家具が置かれ、生活拠点を置くスペースが確保できなかったため、妻が洗濯物を畳んだり鏡台を使用する以外は殆ど使用されていなかった。改善後は副室のDKへの改修により従前副室に配置していた大型家具を大量に廃棄処分し、テーブル使用を希望していたため副室で使用するようになり、食寝分離へ変化している。しかし満足度評価の変化をみると、改善された設備関連の評価の上昇に対し住宅の広さと間取り共に評価は低いままであり、間取りの変更により大幅な生活スタイルの変更を余儀なくされたことが読み取れる。また、改善前は就寝時に座卓をバルコニー側に移動させて布団を敷いていたが、改善後は就寝時に座卓を移動する労力を軽減するため、常時押し入れ側に寄せて配置しており、布団準備始末の労力軽減も副室生活拠点へ移行した一因と考えられる。

(2) 事例C3

同様にC3も、改善前は副室を頻りに宿泊する娘の宿泊室として確保するため、主室でベッド就寝し生活の全てを行っていた。改善後もベッド就寝を継承し、娘の宿泊スペースをベッド脇に確保するため、大きめの座卓を主室に配置できず、副室に座卓を配置し副室生活拠点へ変化している。しかし、畳上でのユカ座志向を継承するため、夫の常座のみ畳上になるよう主室と副室間の襖を取外し、座卓を主室に近い副室に配置しており、二室を一体的に使用する住み方へ変化している。一方、妻は副室の板張り上が常座で、冬期は足元が冷えるため絨毯を敷き対応している。満足度の変化でも、住宅の広さと間取りの評価が低いままであり、ユカ座志向や居室規模確保の住要求と平面構成の整合性がとれていないと言える。

(3) 事例C7

改善前は夫より妻が先に就寝していたC7は、時々宿泊する娘の宿泊室を確保するため、主室で食事・団らん・接客・夫の就寝を行い、副室が妻の就寝室と娘の宿泊室に転用されていた。改善後は、夫の勤務時間の変更により同時刻に夫婦が就寝できるようになり、畳上

での就寝を継承するため妻の就寝が主室へ移行し夫婦同一就寝へ変化している。また C3 同様、娘の宿泊スペースを確保するため、大きめの座卓を副室に配置し副室生活拠点へ移行しており、夫の常座のみ畳上になるよう主室と副室間の襖を取外し、座卓を主室に近い副室に配置し絨毯を二室に敷いている。よって、DK の広さの満足度が低下しており、団らん空間のはみ出しによる台所機能としてのスペース不足が読み取れる。また、給湯設備の評価も低下しており、異なる時間に入浴する家族がその都度湯の追炊きができなくなったことが影響していると考えられる。

(4) 事例 C5

夫が下肢関節を患っている C5 は、改善前は夫のみ台所のテーブルで食事をとり、台所に近い副室で就寝し^{注4)}、妻は副室の座卓で食事をとり、押入れのある主室で就寝する夫婦別就寝で食寝一致の住み方であった。ただし、子供や孫の宿泊時は主室を宿泊室に転用するため、副室で夫婦同一就寝していた。改善後は、当初は改善前の住み方をそのまま継承するため、副室に畳を3帖分敷き夫が就寝していたが、板張り冷え、下肢関節の疾患によりイス座の食事形態を希望していたこともあり、テーブルを新規購入し使用するようになった。その結果、夫の就寝の場が主室へ移行し、夫婦同一就寝で食寝分離の住み方へ変化しており、子供や孫の宿泊時は夫婦も主室で就寝するようになっている。また、従前副室の押入れが玄関と主室を結ぶ廊下を塞ぐ位置に移動したため、夏期の主室の通風が悪化し、夫が通風の得られる副室に畳を3帖分敷いて就寝しており、夏期のみ座卓を使用し夫婦別就寝で食寝一致の住み方になる^{注5)}。よって、住宅の広さや間取りの評価は低いままである。また、満足度の変化で日照通風の評価が低下している。

4.3 夫婦同一就寝・主室生活拠点の事例

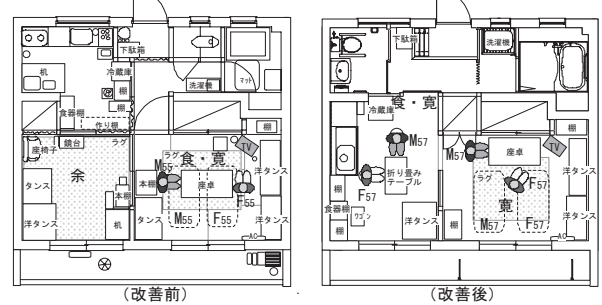
(1) 事例 C1

改善前は副室でユカ座の食事・団らん・接客を行い、主室で夫婦同一就寝する食寝分離の住み方であった C1 は、頻繁に来訪する娘と幼い孫の宿泊時は、主室を宿泊室とするため、副室を夫婦の就寝室に転用していた。改善後はテーブル使用を考えていたが、副室にテーブルを配置すると狭くなり、幼い孫がつまづいて転倒する恐れがあるため、副室で小さめの座卓を使用しており、DK の広さの満足度の評価も低下していることから DK の面積不足が認められる。また、居室関連の評価は日照通風以外が低下しており、畳上でのユカ座志向の継承により、落ち着いてとる昼食の場が主室へ移動して食寝一致へ変化し、副室が板張りになったため娘親子が宿泊できなくなっているためと考えられる。

(2) 事例 C2

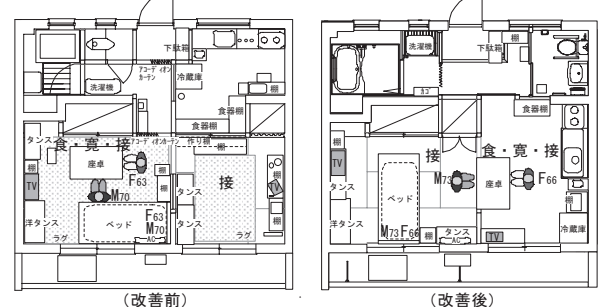
C1 同様、改善前は副室生活拠点で主室にて夫婦同一就寝していた C2 は、夫婦でテレビ視聴番組が異なる時は妻が主室で視聴していた。改善後はテーブルを使用する予定であったが、副室が狭くテーブルを配置できないと判断したため主室に生活拠点を移し、畳上でのユカ座の食事・団らんに継承しているため、結果的に食寝一致へ変化している。また、夫婦が別々の居室でテレビ視聴するスタイルを継承するため、主室が夫、副室が妻の視聴の場に変化しており、夫婦の寛ぎの分離志向の強さが読み取れる。満足度の変化では、DK の広さの評価が上昇しているのに対し、居室関連の評価は普通のまま一

事例 C4 (M57-F57)



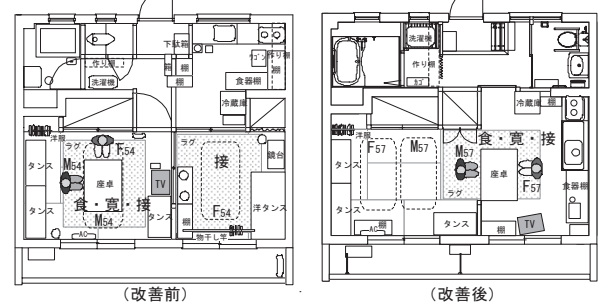
改善後は副室のテーブルや主室の座卓でテレビを視聴している。また、主室に洋タンスを置くスペースが無いため、副室に置いている。

事例 C3 (M73-F66)



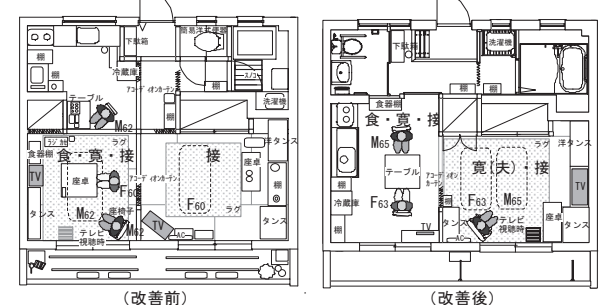
改善後は副室のテレビと主室のテレビを同時につけている時が多い。

事例 C7 (M57-F57)



改善前は夫が深夜帰宅するため夫婦別就寝であったが、改善後は夫が週末のみ自宅にいる勤務形態に変化したこともあり、夫婦同一就寝へと変化した。

事例 C5 (M65-F63)



改善前は、開放感のある居住空間にするため、台所・副室・主室間の建具を取外し、主室と副室間はアコーディオンカーテンを取付け常時開放していたが、孫や子供の宿泊時は就寝時に閉めていた。改善後は、冬期の就寝時にアコーディオンカーテンを開けるようになった。

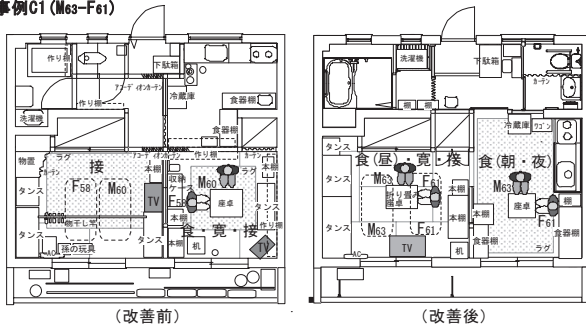
図3 夫婦同一就寝・副室生活拠点の事例

定であり、間取り変更により食寝一致へ移行しなくなることの影響と考えられる。

(3) 事例 C9

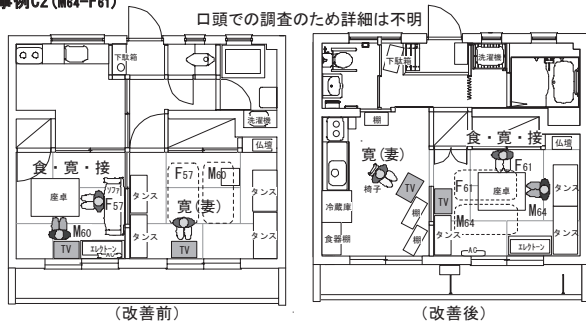
C9 は、改善前は副室で食事をとり、生活時間の相違により夫婦別就寝で妻が食寝一致の住み方であったが、改善後は畳上での食事・

事例C1 (M63-F61)



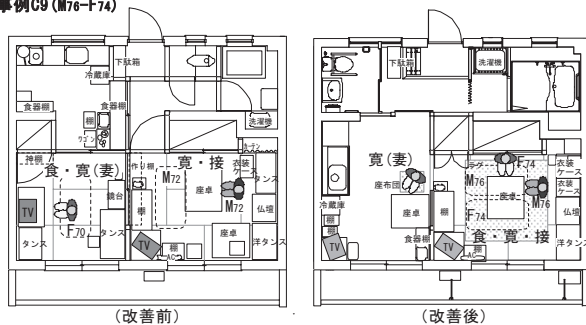
改善前、主室は孫がテレビを視聴したり遊ぶスペースであった。自営業のため、朝と夜の食事は簡単にすませ、昼食を落着いてとっており、改善後は昼食のみ主室にて片付けが容易な折り畳み座卓でとるようになった。また、副室のテレビは廃棄処分した。

事例C2 (M64-F61)



改善後はソファを廃棄し、エアコンが副室から主室へ移動した。副室の新規購入した棚は、副室が広く感じるよう斜めに配置している。エレクトーンは夫が演奏する。

事例C9 (M76-F74)



加齢による足腰の衰えのため、改善前は食事のみ台所に近い副室で折り畳み座卓にてとっていた。改善後は、副室に座布団を敷き妻が寛いでいる。

図4 夫婦同一就寝・主室生活拠点の事例

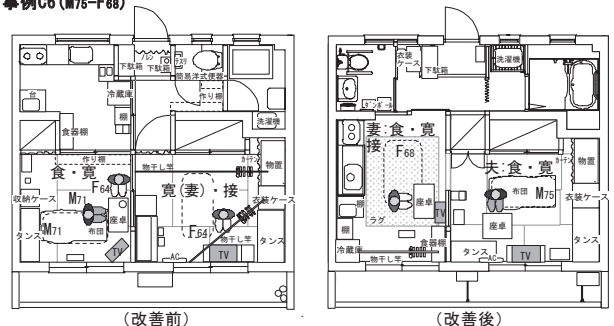
就寝を継承するため、食事と妻の就寝の場が主室へ移行し、食寝一致で夫婦同一就寝の住み方へ変化している。また、C2と同様に改善前は夫婦のテレビ視聴番組の相違により夫が主室、妻が副室で視聴していたが、改善後も夫婦の寛ぎの分離志向は継承され、妻が副室で座卓にて寛ぎを行っている。間取りの変更が生活時間や生活スタイルにも影響しており、住宅の広さと間取りの満足度の低下をもたらしていると考えられる。

4.4 夫婦別就寝・主室生活拠点の事例

(1) 事例C6

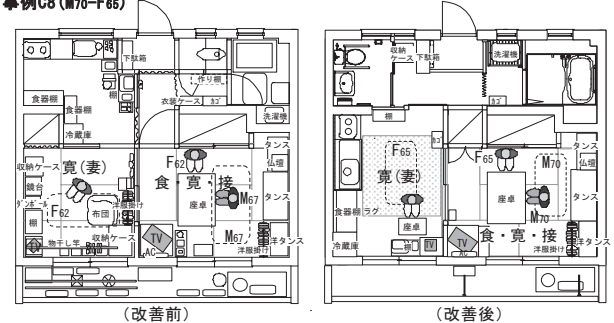
夫が一日中臥床しがちで妻の介護が必要なC6は、改善前は台所に近い副室で夫の生活を完結させ、妻も副室で食事をとるが、一日中夫を介護しなければならず、精神的負担を軽減させるため寛ぎ・就寝は主室で行い、接客も玄関から直接入ることのできる主室で行っていた。改善後は副室が板張りになったため、夫の食事・就寝の場

事例C6 (M75-F68)



改善前子供や孫の宿泊時は2居室使用していたが、改善後は主室で就寝している。また改善後妻は、就寝時に座卓を主室の入口に移動し布団を敷いている。

事例C8 (M70-F65)



改善前後で居室と行為の関係に変化がなく、改善後は副室に絨毯を敷き妻の居場所とする。

図5 夫婦別就寝・主室生活拠点の事例

を和室である主室にそのまま移行させ、妻の寛ぎ・就寝が副室へ移行している。また、玄関から主室へ直接入ることができなくなったため、副室にて接客を行うようになり、間取りの変化による接客動線の変化も住み方を変化させた一因であると考えられる。更に、改善前は台所から主室まで食事を運ぶ距離が長かったため妻も副室で食事をとっていたものの、改善後は副室が妻の個室へ変化したため食事副室の座卓でとるようになり、副室での就寝スペースの確保とユカ座志向の継承により、妻が改善後も副室で座卓を使用していることが読み取れる。

(2) 事例C8

C8は妻のみ働いており起床時間が夫と異なるため、改善前は妻が台所に近い副室を個室として使用し、副室で朝食をとって出勤していた。夫は主室で生活の全てを行い、接客や夫婦一緒に夕食は主室で行われていた。改善後も生活時間に変化は無く、夫婦別々の寛ぎと就寝を継承するため、居室と行為の関係もそのまま継承されている。妻は、副室での就寝とユカ座志向を継承するため、副室が板張りにもかかわらず座卓を使用し、足元が冷えるため絨毯を敷き、冬は電気カーペットを敷き対応している。満足度評価では、他の事例とは異なり居室関連の評価も上昇しているものの、改善部分の評価とは相対的に低い^{注6)}。

5. 結論

本論では、2Kから1DKへの住戸改善前後の中高齢夫婦世帯の居室と行為の対応関係の変化の把握と要因の考察を行った。主な知見を以下にまとめる。

(1) 住戸改善前後の満足度の比較分析より、単身世帯と同様に水まわり設備の充実に対しては評価が高く、特に、トイレと浴室の

設備の評価の変化が顕著で、和式便器から手摺付洋式便器へ新設したトイレ設備や、コンクリート床に直置き浴槽から高齢者向けユニットバスを導入した浴室設備への評価が高くなっている。対照的に、2K から 1DK への間取り変更や住宅の広さに対する評価は若干低下しており、居室の二室から一室への減少が影響していると考えられる。

(2) 副室で食事をとり主室で就寝する食寝分離の住み方の世帯は、2 例から 4 例へ増加したに止まり、その内テーブル使用世帯は 2 例のみである。一方副室が板張りになり、主室で食事・夫婦同一就寝を行う世帯が 3 例増加し、主室が食寝一致となる世帯は 4 例から 5 例へ増加しており、依然として過半数を占め、畳上での食事・就寝志向の強さが認められる。

(3) 副室が DK へ改修されたため、改善前主室完結であった世帯と夫婦別就寝であった世帯が、畳上での就寝の継承により夫婦や来客の就寝の場を主室に確保し、食事の場が副室に移行し食寝一致が解消されている。ただし、イス座志向や布団の準備始末行為の労力軽減により副室へ食事の場を移行した世帯と、座卓が大型なため主室に配置できなかった世帯に分かれる。

(4) 一方改善前副室生活拠点で主室にて夫婦同一就寝する食寝分離の住み方であった世帯は、DK でイス座の食事・団らんを行う面積が不足するため、生活拠点を主室へ移し、畳上で食事・就寝を行う住み方を継承しており、結果的に食寝一致へ変化している。同様に、改善前副室で食事をとり夫婦別就寝であった世帯も、畳上での食事・就寝を継承するため、主室へ食事と妻の就寝の場を移し、夫婦同一就寝と主室での食寝一致へ変化している。また、夫婦の寛ぎの分離志向の強さから、副室が妻の居場所となる傾向が認められる。

(5) 更に、夫婦の生活時間の相違や配偶者の疾患により夫婦別就寝と個室化が進んでいた世帯は、改善後も夫婦がそれぞれの個室を確保する生活スタイルを継承するため、DK が妻の食事・寛ぎ・就寝の場となり、食寝一致が解消されていない。

以上の結果から、2K 型住戸の夫婦世帯向け住戸改善のあり方や住替え誘導に関し考察を加える。

畳上でのユカ座や夫婦別就寝、夫婦の寛ぎの分離等の生活志向により 1DK へ適応する住み方少なく、住み方の個性が認められるため、個々のライフスタイルに対応した改修計画が検討されてよい。具体的には、(1)DK で食事をとり 6 帖で夫婦同一就寝する住み方へ変化した世帯 (4 例)、或いは 6 帖で食事をとり夫婦同一就寝する住み方へ変化した世帯 (1 例) は、食事・団らんの起居形態の志向が異なり、イス座・ユカ座に対応するため、DK の床材は畳あるいは畳と同一寸法の木板パネルを準備する方法が検討されてよい。(2) 改善前の副室生活拠点で主室にて夫婦同一就寝する食寝分離の住み方から、DK の面積不足により食寝一致に変化した世帯 (2 例) の場合には、広めの DK が確保された 1DK への住替え誘導が有効であるが、定住を志向する世帯には、4.5 帖程度の居室を二室確保し、大型家具を収納可能な屋外倉庫を備えた 2K 型改修も検討されてよい。ただし、(3)夫婦の就寝の場が分離している世帯 (3 例) では、二居室が必要なため、食寝分離の住み方を行うには 2DK 規模の住戸への住替え誘導が基本となる。

以上、本論で分析した 9 例においては、2 タイプの改修案と住替

え誘導により対応が可能であると考えられる。ただし、高齢期の多様な住み方を考慮すれば、調査事例を増やし同様の分析を行った場合、上記以外の改修案が必要となる場合も推測される。従って、こうした入居世帯の住み方の個性を反映した改修計画を策定するためには、事前にライフスタイルの聞き取り調査や住替え意向調査を行う相談システムの導入が有効と考えられる。

謝辞

本研究を実施するにあたり、調査の機会を与えて頂いた宇部市住宅課と、住み方調査にご協力頂いた HS 団地の皆様に対し厚くお礼申し上げます。

注

注 1) 参考文献 6) にて、高橋らは個人が住居内で居る決まった場所を「座」とし、その中でも食事や寛ぎ、接客を行うなど日常において滞在時間が長い座を「常座」と定義した。

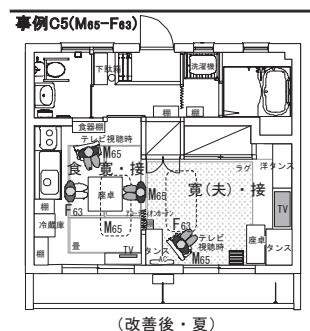
注 2) 食事と団らんが分かれている場合は、食事よりも団らんの時間が長いので、団らんを行う居室を生活拠点室とする。

注 3) 家具占有率は全世帯 0-10% 程度減少しており、殆どの世帯が改修時に家具を廃棄処分している。

注 4) C5 は参考文献 1) では、改善前は夫が主室、妻が副室で就寝していると記述したが、正しくは夫が副室、妻が主室で就寝しており、訂正する。

注 5) テーブルの代わりに畳と改善前から使用している座卓を使用する。テーブルや畳、座卓は屋外倉庫に収納している (付図 1)。

注 6) 回答者が生活スタイルの変化していない夫であることが影響していると考えられる。仮に回答者が妻であれば、住宅の広さや間取りの評価は低下するものと推察される。



付図 1 事例 C5 の夏期の住み方

参考文献

- 1) 中園真人・大庭知子・佐々木俊寿:RC造2K型住戸における住戸改善前の高齢者の住まい方—公営住宅ストックの高齢世帯向け住戸改善に関する研究 その1—, 日本建築学会計画系論文集, 第609号, pp. 107-114, 2006. 11
- 2) 中園真人・大庭知子・佐々木俊寿:宇部市におけるRC造2K型住戸の1DKへの改修による高齢単身世帯の住まい方の変化—公営住宅ストックの高齢世帯向け住戸改善に関する研究 その2—, 日本建築学会計画系論文集, 第639号, pp. 1133-1141, 2009. 5
- 3) 増永理彦・富樫穎:公団賃貸住宅における高齢夫婦の同別室就寝に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第549号, pp. 247-252, 2001. 11
- 4) 山崎さゆり:住居内における中高年夫婦の就寝空間について, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-2分冊, pp. 205-206, 1999. 9, 就寝形態と夫婦関係同その2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-2分冊, pp. 19-20, 2000. 9, 就寝形態と個人の場との関わり 同その3, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-2分冊, pp. 495-496, 2002. 8
- 5) 安枝英俊・高田光雄:生活単位の個人化という視点からみた共働き夫婦の居住空間の構成原理に関する考察—集合住宅の空間構造に関する基礎的研究 その3—, 日本建築学会計画系論文集, 第568号, pp. 17-24, 2003. 6
- 6) 古賀紀江・高橋鷹志:一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察, 日本建築学会計画系論文集, 第494号, pp. 97-104, 1997. 4

(2009年5月10日原稿受理, 2009年12月7日採用決定)